プリズム ①

大橋　智樹

社会と人間 読み解く

心理学は読心学ではない

「いま私が何を考えているか、わかっちゃうんでしょうね」。初対面の人に、大学で心理学を教えていると言うと、たいていはこんな反応が返ってきます。どうやら心理学＝心を読む学問、あるいは、心理学者＝カウンセラーといったイメージが一般的なようです。

結論から言ってしまうと、心理学は心を読む学問ではないと私は思っていますし、このことについてはほとんどの心理学者が賛成してくれると思います。では、心理学とはどんな学問なのでしょうか。この連載では私の専門領域を中心に、心理学という学問を簡単にご紹介したいと考えています。

連載を始めるにあたって、私が心理学者としては珍しい部類に入ることを告白しておこうと思います。

大学院生の頃はパソコンでプログラムを組んで実験を行う認知心理学という領域を専攻し、大学院修了後は原子力発電の現場でヒューマンエラーの防止に心理学を応用する産業心理学的研究に携わり、大学院時代の臨床経験に基づいて臨床心理士の資格を持つ。認知実験、産業現場、臨床経験。こんな心理学者は日本中を探してもほとんどいないと思います。良く言えば幅が広い、悪く言えば根無し草、でしょうか。

こういうちょっと変わった心理学者の話ですから、標準的ではないかもしれません。しかし、社会、人間、心、の関係を心理学者の立場から見つめてみたいと思います。

おおはし・ともき氏　宮城学院女子大学心理行動科学科准教授。1971年東京都生まれ。東北大文学研究科博士後期課程修了。文学博士。臨床心理士。日本学術振興会特別研究員、原子力安全システム研究所研究員を経て、2002年から現職。専門は産業・経営心理学。37歳。

プリズム ②

大橋　智樹

目と心の動きは密接

心理学は行動測定科学

前回、心理学は読心学ではないとお伝えしました。では、どんな学問なのでしょうか。この問いに答えるためには、まず「心」がどんなものかを考えておかねばなりません。

一つ確実に言えることは、心には実体がない、という歴然たる事実です。有史以来、心は一度たりとも目撃されたことがありません。幽霊だって、UFOだって、ツチノコだって目撃例や写真があるのに、心にはそれらが一つもない。心とはそれほどに実体のない存在なのです。

では、心理学はなぜ、実体がない心という対象を実証的な研究として扱えるのでしょうか。その理由は、心理学が、心と密接に関連があって、かつ、確実に実体のある「行動」を直接の研究対象としているからなのです。

つまり、心理学は、「心は行動の背後に存在する」「行動は心の現れである」という前提に立って、その行動を可能な限り客観的に測定することで、間接的に心の働きを研究している学問なのです。

たとえば、「目は心の窓」「目は口ほどにものを言う」などと言いますよね。目の動きと心の働きは密接な関係にあるんです。ならば、目の動きを測定してやれば、その背後に存在する心が探れるのではないか、というスタンスです。

こう考えていくと、心理学は行動を測定する科学であると言えるでしょう。縮めて「行動測定科学」。私の造語ですが、これが私流の心理学の解釈です。こう聞けば「心を読んでいる」という誤解のかなりの部分は、解けるのではないでしょうか。

心理学という言葉を作ったのは、維新期に活躍した思想家・西周（にしあまね）だと言われていますが、ちょっと現代にはそぐわないのかもしれません。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ③

慎重な態度 誤解生む

石橋を叩いて渡らない

大橋　智樹

心理学は読心学ではない。行動測定科学である。前回まではこういうお話をしました。今回は、行動測定科学である心理学がなぜ読心学と誤解されてしまったのか、について考えてみたいと思います。

一つは、もちろん心理学という名称にあるでしょう。人間の心理について勉強しているんだから心を読めるに違いないという推論は、むしろ自然であるといえるかもしれません。

しかし、このことだけが原因ではないでしょう。もっとも大きな原因は、〝石橋を叩(たた)いて渡らない〟とでも言うべき心理学者の慎重さにあるように私は思います。その慎重さは、メディアなどで安易にコメントをしないといった態度となって現れ、結果として、心理学の本質を社会に伝える機会を逸してきたのではないでしょうか。

実はこの慎重な態度こそが心理学の本質を示しています。前にもお話ししたように「心」は実体のない存在であり、つまりは、表面的であればどうにでも解釈できるものなのです。

しかし、心理学の目的は表面的な解釈を並べることではありません。表面から深層まであらゆる可能性を探り、それらを客観的なデータに基づいて示すことで、ある程度の幅を認めつつ、人間一般に存在する心の法則を見つけ出そうとすること。これが心理学の目的です。だからこそ心理学者は慎重になるし、一般の方の目に触れる場所で学問を語ってこなかったのだと思います。そして、それが、誤解を誤解のままにしておくことにつながったのでしょう。

心理学に対する誤解が小さくなって、社会の適切な場面でどんどん活用される。そんな未来を頭の中で描きつつ、連載を進めます。（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ④

心とかみ合ってこそ

視れども見えず

大橋　智樹

中国の四書の一つ「大学」には、次のような言葉があります。

心ここにあらざれば、視(み)れども見えず、聴けども聞こえず、食らえどもその味を知らず。

気もそぞろな状態では、目に光が入ってきてもそれが見えず、耳に音が入ってきてもそれは聞こえず、食べ物を食べても味が分からない。いずれも、前者は物理的な状態、後者は意識の状態を指すのでしょう。

つまり、物理的な状態は意識の状態と常にイコールではなく、そこに「心」が必要であるという意味だと思います。お見合いでとても緊張していて、出てきた料理の味がまったくわからなかった、なんていう状況が好例かもしれません。

私が学生時代から研究している認知心理学では、こういうテーマを扱っています。私は特に、視覚についての研究をしてきました。目でものが見えるためにどういう心理的な作用が必要かという研究で、視覚的注意などと呼ばれる研究分野です。具体的には「視れども見えず」の証明をしようとしていました。

長い年月と、たくさんの失敗、多くの人の協力のおかげで、明らかに「視て」いるのに「見えて」いないという現象を、確認する実験に成功しました。日常的には経験がある方も多いでしょう。例えば、電話をかけながらテレビを視ていてもテレビの内容はまったく見えていない、とか。こういうよくある経験を実験的に再現したということです。

このように、人間がものを見たり聞いたりする時には、二つの仕組みが必要なようです。一つは眼球や脳といった物理的な仕組み。もう一つは、物理的な仕組みを働かせる心の仕組み。これら二つの仕組みがうまくかみ合って初めて、見えたり、聞こえたり、味わえたり、するということですね。

こんな研究も心理学の一つなのです。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑤

大橋　智樹

相互に循環 研究発展

理論と実践（1）

どの学問にも共通の特徴ではありますが、心理学の研究も理論的な研究と実践的な研究に分けることができます。

理論的な研究とは、心の特性について一般的な法則を確立することが主な目的となる研究を指します。前回お話しした「視（み）れども見えず」のような認知心理学的研究は、まさにこのような一般法則性を導くことを目指した研究です。人間が「ものを見る」ときに、先入観や意欲などのような心がどのような役割を持ち、どのように働いているのかということを〝記述する〟ことがゴールとなるのです。

これに対して、実践的な研究とは、日々の暮らしの中で実際に起こっている何らかの問題に対して、その解決に心理学の知識を適用したり、心理学のやり方で解決策を探ったりする研究です。もちろん、この種類の研究のゴールは〝問題の緩和や解決〟。例えば、生きることに疲れてしまった人が、明日を楽しみにできるために心理学に何ができるか。臨床心理学という研究分野はその代表格と言えるかもしれません。

これら「理論」と「実践」が別々の研究かというと、そんなことはありません。私はこの両者が〝循環関係〟にあると考えています。つまり、理論的研究に基づいて実践的な研究が行われ、実践上の必要性から理論的研究が発展する。こんな関係ではないでしょうか。

私の主な関心は、産業心理学という実践的な研究領域にあります。つまり、学生時代は理論的な研究を中心にすえていて、研究所に移ってからは本格的に実践的な研究も始めたことになるわけです。

現在は、理論と実践の両方をその時の関心に応じて行ったり来たり、あるいは中間にとどまったりしながら研究をしています。次回は、行ったり来たりの様子を詳しくお話ししましょう。（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑥

大橋　智樹

実験的に問題を再現

理論と実践（2）

この記事もそうですが、新聞などの出版物には誤字や脱字があってはいけません。ですから、印刷前に行うチェック（校正）は大変重要な作業です。しかし、人間はどうしても見落としをしてしまう。このような見落としも産業の現場で起こっている問題の一つですから、産業心理学が扱う研究テーマに含まれます。

少し前に大学院生と一緒にこの校正の研究に取り組んだことがあります。研究の目的は、どんなときにミスを見落としやすいのか、逆に、どんなミスには気づきやすいのか。これらを明らかにすることです。

研究のやり方はいろいろと考えられます。たとえば、新聞社にお願いして過去の校正ミスの情報を提供してもらい、それらを詳細に分析することで、ミスに共通する要因を探し出す。実践的な研究としては、こんなアプローチになるでしょう。

私たちは、理論的な研究としてこの問題に取り組みました。すなわち、実験的にミスを含めた文章を用いて、校正作業を多くの人にやってもらい、その結果を分析して、人間がミスをする特徴を記述しようとしたのです。これらの研究からは、一つの単語が行をまたいでいるときにはミスに気づきにくいことや、意味を考えながら文章を読むとミスに気づきやすいことなどがわかりました。

現場で起こっている問題を実験的に再現し、その結果から人間の特性を探る。そこでわかったことを、現場の問題解決の参考にしてもらう。これも理論と実践の循環関係の一部です。

実は、ここまでの文章には意図的に入れた脱字が一カ所ありました。多くの方は気づかなかったのではないでしょうか。人間は、一文字くらい抜けていてもなかなか気づかない。それも心の特性の一つなのです。（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑦

大橋　智樹

人間を知り事故防ぐ

エラーせずには生きられない

産業現場で発生する事故原因の一つに、ヒューマンエラーがあげられます。たとえば、二〇〇五年に発生した福知山線の脱線転覆事故は記憶に新しいところでしょう。国の事故調査委員会は、運転士が運転以外のことに気をとられたことでブレーキ操作をしなかったことが事故の直接の原因であると推測しています。つまり、運転士自身を含む百六人の命を奪い、五百人を超す人を傷つけたこの事故は、〝ブレーキの失敗〟というエラーによって引き起こされたことになります。

人間のエラーは時としてこのような大惨事を引き起こします。しかし、エラーという行為自体は特別なことではありません。簡単に言ってしまうと、人間はエラーをせずには生きられない。そういう存在なのです。

このことは人間がうっかりしていることを意味するのではありません。そもそも人間が見たり聞いたりする際にエラーは避けられないのです。

たとえば、寝ているときに音が聞こえないのも厳密に言えばエラーです。耳は起きている時と変わらずに開いていますから、音も変わらずに耳に入ってくる。でも、常に音が聞こえていたら、たぶん熟睡できません。だから、聞こえないようにしちゃう。これも人間が生きるために必要なエラーと言えるでしょう。

ここで、この先を読まずに上の実験クイズをやってみてください。

正答は、最も間違っているように感じられる答えでしたね。物理的な事実と心理的な印象にギャップがある。このような現象を「錯視」と呼びます。正確に認識できないという意味において、これもエラーの一種です。

錯視に代表される人間の能力は、時に大事故の原因になります。ですから、事故を防ぐためには、人間をよく知る必要があるのです。

そして、そこに心理学の出番があります。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

訂正　10日付で「百六人の命」とあったのは、正しくは「百七人の命」でした。

プリズム ⑧

大橋　智樹

暗黙の空間認識 存在

コンロと心理学

前回は、人間にとってヒューマンエラーとはごく普通の行為なのだということを、実験クイズの欄も借りてお話ししました。そして、そこに心理学の出番があると結びました。今回は、その出番についてお話しましょう。

どの家にも煮炊きをするためのコンロがありますよね。そしてそのコンロには、火力を調節するためのボタンやレバーがついています。回すもの、スライドさせるもの、ボタンを押すもの。いろいろありますが、この操作でエラーをしたことはありませんか？

少し前に私の家にあったガスコンロは、スライドさせる方式でした。このレバー、右に動かすと火が小さく、左に動かすと大きくなる。そういう仕組みだったのですが、私は、何度も逆に操作してしまったことがあります。

つまり、火を小さくしようとして逆に大きくしてしまったというエラーです。鍋の湯が急に噴きこぼれ、とっさに火を弱めようとしたときなどに、多く発生するようです。

このようなエラーがなぜ起こるのか。〝犯人〟はレバーだと思います。

実は、人間にとって何かが小さくなることは左側に移動すること、大きくなることは右側に移動することを意味するのです。右側は大きなもの、高いもの、優れたものの位置。そういう暗黙の空間認識があるのです。「右に出る者がいない」という言葉から考えても、この空間認識の存在は支持されるでしょう。

私の家にあったコンロのレバーは、この空間認識と一致していませんでした。だから、とっさの時にエラーを発生させてしまったのでしょう。

このような暗黙の感覚と一致しない製品は、エラーの温床になります。そして、人間にどんな暗黙の感覚が存在するかを明らかにできる一番のプロは心理学者だ、と私は思っています。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑨

大橋　智樹

空間認識 各国で違い

矢印の意味

この連載も今日で九回目。これまでの八回は、心理学とその分野の一つである産業心理学についてご紹介することを目的に記事を書いてきました。

残りの数回は、そういう学問の世界にいる私が、社会をどのように見ているか。そんなお話をしたいと思います。

ある人の社会の見方を端的に表すものの一つに写真があります。私も旅に出るとよく写真を撮ります。特に、国際学会で海外に行くとき、撮影枚数は激増します。一週間ほどの滞在で千枚から千五百枚くらい。これが私の標準的な撮影枚数です。そして、それらの写真には、私が社会を見る特徴が見事に現れています。

写真に写っているのは、標識、エスカレーター、エレベーターのボタン、バスの運転席、つり革、公衆トイレ…もちろん、普通の景色も撮りますよ。でも、右にあげたような、他人から見たら〝変なもの〟が私にとっては世界遺産の景色よりも大切な記録なのです。

たとえば、ヨーロッパには矢印の表示方法が日本とは異なる国があります。特に「まっすぐ行くと○○がある」ということを意味する矢印。これを進行方向に垂直に立っている（ぶら下がっている）看板でどう表現するか。日本では上向きの矢印しか使いません。でも、私の写真には、下向きの矢印で表現された看板がたくさん写っています。私たちの感覚では階下を意味するように感じられる標識です。

これは三次元の世界を二次元に表現する工夫が異なるということ。ひょっとしたら、日本人とヨーロッパ人の空間認識の違いを表しているのかもしれない。私はそう考えて、矢印を見つけるたびにシャッターを切る。これが私の社会の見方です。

そんな見方をもった私が、次回以降はちょっとお堅く「安全と安心」について考えてみたいと思います。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑩

大橋　智樹

セットでの使用 問題

安全と安心

二〇〇八年も今日で終わりですね。今年は、北京五輪あたりを境目に大きく変化し、世界的に転換を迫られた年でした。

十三年前の一九九五年は日本の安全にとって大きな転換期となった年と言えます。一月に阪神・淡路大震災、三月には地下鉄サリン事件が起き、いずれも未曽有の衝撃を与えました。

かつて私たちが行った研究は、この年から「安全・安心」というキーワードが〝大増殖〟したことを明らかにしました。新聞記事と新聞広告の分析から、この年を境に二つのキーワードをどちらも含む記事・広告数が一気に増え、一九九〇年を基準として二〇〇〇年には実に三倍弱に達することがわかったのです。

これらのデータから私たちは、国全体の意識が「安全と安心」に重点を置く方向に大きく変わったようだと結論づけました。原因が何であったかは議論があるでしょうが、変化が生じたことは間違いないと言えます。

「安全と安心」を求める傾向は、食品偽装などが相次いだ今年、さらに強くなったと言えるでしょう。スーパーには「安全・安心の食材」などという表示が並び、街では「安全で安心できる街づくりを」といった看板を見かけます。

私がとても気になることは、これらの言葉がセットで使われていること。実は、これらの言葉の意味することは、それこそ〝月とすっぽん〟程にかけ離れているのです。

そして、意味が異なる二つの言葉をセットで使っていることが、安全にとっても安心にとっても、それらの実現の障害となっていることを指摘する声はほとんどありません。

これらの言葉がどう違うのか。なぜセットで使うことが障害になるのか。除夜の鐘を聞きながら、お雑煮を食べながら、ちょっと考えてみてください。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑪

大橋　智樂

「安全」とは何か

危険の存在を前提に

安全と安心の違い。セットで使うことの問題点。考えていただけましたか。

私は、安全は客観的に測ることのできる事実に基づいて、安心は主観的な印象に基づいて、判断されることだと考えています。そして、これらをセットで扱うことによって、両者の違いにしっかりと目を向ける機会を奪ってしまうと思うのです。

ですから、まずは安全について考えてみましょう。

かつて私たちが行った研究では、安全とは何か、という問いに「危険が存在しない状態」という種類の答えが最も多く返ってきました。しかし、危険が皆無な状態なんて実はこの世に存在しないのです。そして、多くの人が、そのようなイメージで安全をとらえていることが、安全の本質に関する理解を難しくしているのだと思います。

私は安全を「危険の存在が許容できる程度に小さい状態」と考えています。つまり、危険の存在を前提として、それが十分に低められている状態ということ。たとえば、猛毒をもつヘビが頑丈なケースの中に入れられて目の前に置かれる。そんな状態です。

問題は〝許容できる程度に〟という部分。〝許容範囲〟は、人によって大きく異なるからです。たとえば原子力発電所の安全性について、同じ客観的事実に基づいて議論をしても結論が分かれることが多いのは、この〝主観的線引き〟の役割が大きいからです。ヘビの例で言えば「頑丈なケース」がこれに当たります。

線引きについては大いに議論すべきでしょう。しかし、危険ゼロという状態は実現不可能であるということだけは、社会的に合意されなければなりません。つまり、安全という状態には常に危険が内包されていることを誰もが認めること。

このことこそが、安全の実現への第一歩だと思います。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑫

大橋　智樂

「安心」とは何か（１）

五つの心理状態含む

前回は安全とは何かを考え、客観的な事実＋主観的線引きである、と述べました。安全かどうかは、実は主観によって決まる、という考え方です。

さて、一方の「安心」はどうでしょうか。安心は、まさに主観的な事柄、すなわち心の問題であることに、疑問の余地はないでしょう。しかしそれだけに、安心とは何かという問いに答えることは簡単ではありません。

この難題に二回に分けて挑んでみたいと思います。

心理学ではこういう問いに答えようとするとき、まずは事実を調べるところから始めます。今回もその手でいきましょう。

最初は「書名」について。

国立国会図書館には、法律で定められた納本制度によって、日本国内で発行されたすべての書籍が集まっています。そのデータベースで「安心」を検索してみると、この言葉、一九七〇年代までの書名では、その多くが仏教用語として使われていることがわかりました。たとえば、『○○宗安心法話』といった書名が並びます。

しかし、八〇年代に入ると、仏教用語として使われる割合は激減。『血圧を下げる安心読本』など、いまでも書店に並んでいそうな書名が増えてきます。書名は世相を映す鏡の一つですから、現在の「安心」は八〇年代から、ということになりそうです。

一方、私が行った研究で、安心という言葉には、次の五つのイメージが含まれていることがわかりました。心が落ち着いている状態、頼る人がいる状態、備えがある状態、危険がない状態、一時的な状態、の五つです。この研究結果から、安心というわずか二文字・四音の言葉には、さまざまな心が詰まっていることがわかります。

これらの事実から、安心という言葉の特徴が少し見えてきます。次回はそれを私なりに解釈してみようと思います。（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑬

大橋　智樹

心の欠乏埋める言葉

「安心」とは何か（２）

今回はこれまでお示ししたデータなどに基づいて、私なりに安心を考えてみます。ただし安全という言葉は使いません。純粋に安心だけを見つめてみます。安全と安心をどう結びつけるかは、次回にお話しします。

まず、一九八〇年ごろと九五年ごろの二回、安心という言葉の概念が変化した事実は、いったい何を意味するのでしょうか。両者に共通する要因としては〝不況〟があげられます。不況期は人々（社会）が価値観の変化を迫られる時期でもあり、時を同じくして安心に新たな使われ方が加わるという特徴があるわけです。

不況期には好景気に謳歌（おうか）していた物質的な豊かさが奪われます。つまり豊かさの欠乏が起こるわけです。人間は欠乏を嫌いますから、それを何かで埋めたくなる。その〝何か〟の代表格が「安心」なのではないでしょうか。たとえば、価格や性能で勝負できなくなったときに「安心のサービス」などとアピールし始めるなどがこれに当たるでしょう。価格や性能に比べて、何がお得なのかがとても曖昧（あいまい）ですが、消費者はその言葉しか他と差別化する手段がないわけです。このようにして「安心」は日本の社会の中で存在感を大きくしてきたように思います。

こう考えると、安心は欠乏や不安定を嫌う特徴を持つ人間が創（つく）り出した心の状態と言えるかもしれません。ただし、どっしりと腰を据えたような安定感はない、微妙なバランスの上に成り立っている一時的な安定。繊細できわめて主観的な心の状態。それが安心ではないでしょうか。

ですから、「安心を与えるためになにをすべきか」などというたい文句は、私には少々乱暴に感じます。こう表現している時点で、何をしても安心は生まれないでしょう。安心は心の中にふわっと生まれるもので、誰かから押しつけられるようなものではないのです。（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑭

大橋　智樹

疑いもたない状態を

安全を安心に結びつけるために

安全であることを伝えて安心してもらいたい。技術に携わる人、特に、焼却炉、原子力発電所など潜在的な危険性の高い施設や、遺伝子組み換えなどの新たな科学技術にかかわる技術者は、この気持ちを強く持っています。しかし、その気持ちをうまく伝える術（すべ）に長（た）けている人はそう多くはありません。

どのようにしたら、安全は安心に結びつくのでしょうか。今回は、これまでお話ししてきたことを踏まえて、私なりの考えをお話ししたいと思います。

「安心＝安全＋信頼」という主張をみることがあります。安全を訴えている人や組織に対する〝信頼〟が、メッセージの信ぴょう性を高め、やがて安心を生む。こういう考え方です。

私は、この考え方では安全を安心に結びつけられないと考えています。この考え方には足りないものがある。それは「疑いをもたないこと」です。

たとえば、駅のホームに並んでいるとき、後ろに立つ人はあなたをホームから突き落とすような人ではないと〝信頼〟していますか？　いや違うでしょう。突き落とされるなんてことは、そもそも考えていないのです。

信頼とはまず何らかの疑いが存在していて、しかし何らかの根拠に基づいて大丈夫だろうとわざわざ〝判断〟することです。しかし、すべてにそのような判断をしているわけはありません。むしろ、多くの事柄に対して人は、疑いすらもたないのです。

安全に基づく安心には、このような「疑いすらもたない」状態が必須だと思います。信頼という判断を強いられる状態では安心は生まれません。誰かに安心してもらいたいと望むなら、「疑いすらもたれない」ために何をしたらいいかを考えるべきでしょう。少なくともそれは数字でも論理でもありません。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

プリズム ⑮完

文・理越えた協働必要

科学の未来はあなたが選ぶ

大橋　智樹

私の連載も今回が最後です。前半は心理学を行動測定科学と位置づけ、私の専門分野を中心に紹介しました。後半は科学技術に常につきまとう安全と安心の問題を取り上げ、私なりに社会と科学の関係を考えました。

この中で、安全と安心はまったく異なる概念だけれど、実はどちらも心の問題だと述べました。安全を心の問題として扱うのは新しい考え方でしょう。安心は心理学の扱う心に近いようです。無形でとらえどころがなく、変幻自在で多様。二十一世紀を目前にして、安全と安心が結びついたのは、必然なのかもしれません。

現在、人類はおそらく成熟期にあります。発展期においては、技術日体の発展が科学にとって唯一の目標でよかった。しかし、これからの科学は、技術や製品といったハードウエアの開発よりも、開発の思想や製品利用の姿勢などソフトウエア面に重点がおかれるでしょう。医学教育が治療技術だけではなく、患者とどう接するかというまさにソフトウエアを重視し始めたことは一つの好例かもしれません。

社会は変化し、それにともなって科学のあるべき姿も変化します。科学の新たな要求に心理学が応えねばならないと感じる一方で、哲学や倫理学など別の示唆をもつ学問との協働が不可欠だとも思います。いわゆる理科系・文科系の壁を越える必要性はますます高まるはずです。

そしてなにより、これまで科学と技術の〝単なる利用者〟だった一般の人々のかかわりが重要になるでしょう。種や生命にかかわる技術、資源の有効利用など、一人一人が真剣に考え、自らの責任で選択をしないと解決できない問題が多いからです。

この連載が、考えることと選択することの大切さを、ほんの少しでも伝えられたなら幸いに思います。

（宮城学院女子大心理行動科学科准教授）

デスク日誌

＝地雷＝

隣のデスク席で同僚がうめく。「また地雷が埋まってた」。原稿中の誤字脱字を指して、危なく踏む（見逃す）ところだったとぼやいているのだ。デスクの仕事は紙面全体の中での記事の調整や原稿中の事実関係チェックはもちろん、校正作業のウエートも大きい。

三日付の科学面で、宮城学院女子大の大橋智樹准教授がありがたい指摘をしてくれていた。産業心理学の研究で、一つの単語が行をまたいでいると、ミスに気付きにくいことが分かったという。

その記事の中に意図的に脱字を仕掛けてあるので、見つけてごらんなさいという。恥ずかしながら、三度読み返してしまった。あまりに見つからないので、優秀（？）なデスクが直してしまったのではないかと、冷や汗が出たほどだ。

当方も日々、生原稿に目を通している経験則から、促音「っ」の前後が危ないということが分かっている。一セットの句として読んでしまうため、一文字ぐらい抜けていてもなかなか気付かない。

きょうも「頭を強くって意識不明の重体」「…にまで発展することはなったかもしれない」と、デスクを試しているかのような原稿に出くわした。危ない危ない。

（報道部副部長　新追宏）